会員の声

さきにアンケートをとりましたもののうち㈠村研今後の全体としてのあり方 ㈡今年度大会に要望 を掲載しました（順不同）

―事務局―

㈠ 全体としてのあり方

中野 卓

連絡の必ずしもとりやすい場所ではない現事務局が、それを克服しながら事務局活動の成果を上げて下さっている事を感謝します。

研究通信への投稿を更に活潑にする事が、会員として我々の研究会を、我々のものとするための重要な方法の一つであること、大会・年報・村研通信の三者を会員・事務局・委員会の三者で一層もりあげてゆこう。

吉沢 四郎

原稿を提出しないで、茨だ勝手な希望ですが、「会報」をもっと増頁して、論文なども掲載して、もっと読みごたえのあるものにしたいものです。財政の問題も根本にあると思いますが、対策を講じていただけないでしょうか。

森岡 清美

協同研究ないし研究上の協力が各地域において促進され、それが研究通信の記事にも、また村研通信が、さような気運を鼓舞するような役割を演ずることを望む。

桜田 勝徳

前々から、大いに期待しているが、それ以上注文を出す程に接触できないのが残念。にも拘らず、いろいろ連絡をいただき、それに対する返事もいたさず過ぎてきた失礼をおわび致します。

桜井 徳太郎

共同体内の経済、社会学、いわゆる基礎構造の追求はかなり経験的に行われてきたが、思想なり、宗教（つまり民間信仰）、文化等の上部構造（あまりいゝ言葉でないけれども）の分析はあまり行われなかった。その上部構造も、いわゆる表層面だけのアプローチでなくて、その基層面からの分析研究がたちおくれていると考える。この点にも触れていただけたらと思う。

江馬 威也

法社会学関係の研究者との連結。

有賀 喜左衛門

各地の研究者の連絡がもっと密になって、共同の問題に対する相互の討究が盛んになることを希望するが、現状は中々それがうまくゆかないので残念である。

大山 彦一

大会の開催期日でありますが、私共「地方」に在住する者にとっては、日本社会学会に引きつづいて、期日が定められることが望ましい。学会大会のために二回以上上京する事は、不可能とは思いませんが、困難を覚えます。村研に属する人は、多くは日本社会学会の会員ではないでしょうか。（民族学会、又社会経済史学会など、ひきつづいてもよいかと思います。）日本社会学会大会にひきつづいて、村研の年次大会が行われても、その「独立性」に影響あるものとは思われないようです。年度のテーマを「共同課題」で行われる事も結構ですが、それと並行して、各個独自の研究報告が行われる事もよいように思います。

吉井藤重郎

別に異議なく、運営に当って下さる諸賢に感謝しております。

斉藤 兵市

「共同体とは何か」わかったようで、わからない、この本質論について十分討論する事がのぞましい。

喜多野 清一

地方の研究態勢がとゝのうこと。平常の研究交流が活潑になること。

山田 敬道

「社会学的観点」をもっと明白に確立したい。個別的な実態調査の研究もさりながら、もっと巨視的立場に立つ、基礎的方法論を主要課題としたい。

高倉 又二

最近一向に御無沙汰いたしてしまい、誠に申訳なく存じております。然し、静かに反省いたし、端的に申上げた場合、御無沙汰の根柢には、より本質的なものがあった様に思います。勿論、村研の在り方についてといった事ではなく、この数年間にはっきり露呈されて来た農村農業の現実と、それを構想分析する農村農業理論とのギャップ、そこから感成される混迷、焦燥、誤謬、こうしたものが、やはり、個人的にも御無沙汰という姿になっ

たと反省いたしております。やっと正しい学習の姿勢に向う時機が、こうした空しさ、苦しさの中から、芽生えつつあるのではないかと存じます。そうした意味で、貴重なこの数年間だったと存じ、村研が今迄志向されたことを、そうした学習の場としての急々の充実を祈念します。

山　室　周　平

村落社会研究会が、まずもっと日本村落社会研究会であるべきは勿論であるが、そのためにも、ヨーロッパや、アメリカにおける研究がもっと参照されてよいのではなかろうか。将来、いろいろの方面の研究をやっている人々にも、もっと積極的に参加してもらう為、場合によっては、部会でも設けてはいかゞ。

森　村　勝

(一) 社会学、経済学、政治学など諸科学のより一層の交流を。

(二) 調査と理論の結合。

(三) 歴史的体制的視点の強化。

中　村　正　夫

取立てて希望意見はありません。むしろ、小生としてはもっと積極的に参加したいと思っているのですが、九州からの参加は経費その他の点で、制約をうけますので残念であります。

松　原　治　郎

村研も少し中だるみの感じがしますが、本年の大会を期して、活潑化させる必要はありませんか？　又外部に対する宣伝もある程度すべきだと思います。

小　川　徹

大へん結構だと思います。村落研究の問題点を学びたいと思っています。

山　本　登

全体として、やゝ formalism してきた気持。methodolgy の交代などあれば、やむをえない事とも考えられるが。共同の調査という程のものでなく、各会員が機会に応じて、これだけは調査する、といった共通の項目位は作成できないものか。もっともあまりくわしくなると困難となるが。

松　村　安　一

創立当初に比し、全体の関心が低くなっているのではないかという疑問をもっています。これを当初のように盛上る方向に持って行く事を考えねばならないでしょう。

蓮　見　音　彦

社会学、経済学その他社会科学との交流としての役割を、年々より一層発揮するようになり、大いに有意義だと思いますが、もっと多くの方の参加が期待されてよいのではないでしょうか。経済学、経済史学、農業経済学などにも、まだ会員となっていただきたい方が多いですし、その他、法社会学や政治学、法律学などにもあるように思いますが、村落の問題は今日、綜合的な視野が一層必要になってきていると思いますので。

安　孫　子　麟

折角、各専門分野の方が集り、村落の問題をやっているので、それぞれの専門の立場を積極的に主張して、その上で綜合する方向をとられる事を望みます。実際の大会の共通テーマの報告者をみますと、そのバランスがうまくとれていないようにも思われます。どんな会でもそうですが、何か共通の討論の場が狭いので、その点村研は一番テーマ的には、恵まれているのに、どうも上手にかみ合わないようです。その点で、大会のテーマも考えて頂きたいものです。何か皆が歴史的な仕事をしていたのでは、各専門の意味が薄れてしまうのではないでしょうか。その意味では泊り込みの大会も賛成ですが、共通の場を早く作る事をやるべきじゃあないかと思います。

飯　塚　博　久

私の希望――研究通信の外に年報形式のものをタイプ印刷でもよいから発行して会員研究発表の場を作ってほしい。名簿などはそれに一緒にのせるとよいと思われる。

(二) 今年度大会に要望

中　野　卓

待望の泊り込み討論をふくむ大会の運営。例年、果し得なかった事だが、充分なるレジュメを発表者全員が、予め事務局の手数をかけないように、催促されないでも〆切までに提出し、会員全体が大会に集るよりも以前にレジュメを入手できるようにする事が望ましい。

吉　沢　四　郎

宿泊設備、調査対象地等で問題はあると思いますが、一つの村落を共同調査して（グループ毎に）その結果を討論というようにしたら、把え方について種々の見解が出されるし、理解の仕方についても相違があろうし、興味

ある大会になると思います。

森　岡　清　美

討論に於て、事実の相互提供も大切だが、そうした事実をつかみ整理する方法論の相互検討が又大切であるから、司会される先生に於て、この点御考慮いただきたい。

桜　井　徳　太　郎

テーマの選び方も、共同体内の思想、民間信仰、文化等の上部構造の基層面からの分析研究がたち遅れていると考える故、これに沿うて、もっと巾を広くして頂きたい。焦点はなるべくしぼらなければならない。しぼる程成功する。唯、それを広い分野から眺めてゆくという方向が望ましい。

内　山　敬　照

有賀、喜多野両大御所に、今度はじっくり三時間でも四時間でも自説を展開して頂き、それに向って、メンバーが総討議を試みるというのは、如何。

山　岡　栄　市

(一)問題提起を明確にして頂く事。社会学者の側からのみでなく、経済学、経済史学等の接の立場からも。(二)討議をなるべく気軽に、ゆっくりと時間をかけてやるようにしたい。此の意味で一泊二日の会期は必要です。

江　馬　威　也

シンポジウム及び討論会形式のものの充分な時間的余裕を与える事。

有賀　喜左衛門

共同宿泊の大会を我々は希望していた。鳴子に行きたいという事もその意味で、日常的に接触できないから、一日でもゆっくり膝をつき合せて話をしたい。そういう機会から将来の共同の討究を盛んにするきっかけを作りたい。鳴子で二泊か三泊位するように参会者にお願いしたい。

鈴　木　広

十一月初旬、鳴子で開くよう希望する。(期日は日本社会学会とは別に)

大　山　彦　一

今年度も大会期日は、日本社会学会大会にひきつづいて定められる事が望ましい。其開催場所は勿論日本社会学会大会の場所とは別に行われると思いますが、其場所はどこであっても差支えありません。

吉　井　藤　重　郎

出来る限り、東京で行われる日本社会学会の前後に、先日御連絡下さった鳴子ででも開いて下さるならば、長距離旅行者には大いに便宜に感ぜられます。

北　川　隆　吉

原則としては、研究通信No.26の福武提案に賛成ですが、会員の方々の色々の都合もありますから、場所は変更になってもいゝと思います。年一回の大会ですから、できるだけ沢山の方が集って討論ができればと思います。

斉　藤　兵　市

発表何分、質疑何分、という形式をやめ、発表後、部会を編成して十分討論するような形式がのぞましい。

喜　多　野　清　一

共通課題についての討議が纏まった成果になる事を希望します。但し、毎年段々よくなっているのではないですか。急によくなるものでもないし無理に恰好をつける事も危険でしょう。

内　藤　莞　爾

日本社会学会の前後にやってもらえると出席できるのですが。

高　倉　又　二

発表は出来る限り、勿論限界はあると思いますが、全国的展望に結び得、理論化への志向において集約された形態なり、内容なりが用意される事が望ましい。調査地そのものに行って見ねば判らぬと言ったような形で提起される報告はお互に避けたいと思う。そうした特殊性を貫徹する法則的なものへの大胆な問題提起(その事は細心なる分析と再構想によってのみ可能でしょう)を期待したい。

山　室　周　平

村研が研究対象を日本村落研究にとゞめず、ヨーロッパ、アメリカに於ける研究の交流があってもよいと思う故、ぜひ今年でなければならないという事ではないが、課題が課題だけに、大塚久雄とか高橋幸八郎氏あたりの参加を得るようにしたら、意義深くなりはしまいか。

森　村　勝

共通課題のもとに統一的な討論を。

中　村　正　夫

とにかく何とか参加したいと思案中です。

原　宏

今年度の開催期日は日本社会学会に引続いて行う方が、出席し易いのでそう願いたい。

木　下　彰

宮城県鳴子町での泊り込み開催にほぼ決定

された趣きにつき、所在地居住会員として、非常に責任を感じますので、この試みを成功させる為、出来るだけ要望事項を在仙会員に早めに御連絡ありたし。

松原治郎

ぜひ、合宿大会を進めて下さい。こゝで共同体論に関して少し権威ある意見をまとめる事が大切かと存じます。

園田恭一

昨年度の大会で決められたテーマを、各分野から追求して頂きたいと思っています。

小川徹

村落研究の問題点を学びたいと思っているので、是非参加したいと準備中です。昨年始めて大会に出席した感じでは、シンポジウムに比して、発表会は討論が少なく、もっと活用の方法がないものかと思いました。

山本登

鳴子温泉のプランはたしかに食欲をそゝるが、いざそのために出掛けるとなると、やはり、尻が重くなる感じもする。箱根か熱海あたりで、お願い出来ればとも考える。共同で村に入るといっても、結局は時間切れになって了うのではないか。併し、昨年度の東京的なものならば、二日間やるだけの意味はなさそうに考えられる。

蓮見音彦

共同体の問題について、二日間の会合がもたれるのでしたら、その一部は年報第三集「共同体の構造分析」の執筆者の方々を中心としたシンポジウムにあてていたゞきたいと思います。夫々の先生方のその後の御考えの発展や、討論をうかがいたいし、会員の質問にもお答えいただきたいと思うのですが。

中田爽

共同課題の方の報告は、前年度のように各テーマ毎に（各専門分野別――歴史、経済、地理、社会学といった――あるいは地域別――東北、関西、とか平地、山地別とか――といったように）集中的に行われるように、できれば大変いゝと思うのですが、いかゞでしょうか。

飯塚博久

仙台の大会は一寸遠いように思え、できれば東京がよいと思う。それから分科会も少し多くし、少数者の話し合いの場を作ることが大切な様に思われる。